

閑話休憩題6

しづかりいふ

仲秋の名月を愛でながら普簫が言った。

「たとえば、何かを考えようとする前に、まず考える前のその意識、思考のスタートラインとも言つべきその場所で、その意識という場所を見廻し、攔かれた状況（ニ）では『攔かれた』に主語を用いない。なぜなら動作や状態に主体が伴つというドクサに陥るからだ」を鑑みるとする。

すると思考をしようとする前から既にかなり出来上がった・固定された・状況に在り、状態に有ることに気が附く。けれど偏向や前提のない純粹な状態での、零から純粹に論理を組み上げて思考を進めると言い切れる環境ではないことに気が附く。根拠の証明されていない前提が既に山ほど積み上がっていて、『世界』という球体の内壁を築き上げている。そこにいるのだと強く直観される。

しかも一步でも思考を進めようとしてもしようものなら、ガチガチに固定されて不自由なルールの上を、自由のない閉塞した球体の内側で蕩揺くような感じで進む以外の『進み』というものが有り得ない。無条件な出発に拠る自由な思考は有り得ない。

そしてなぜ純粹・自由でなきゃいけないのかまったくわからない。むろん経験知から普遍化した智慧だろうが、だがそれらをそう捉える捉えが既に不明確だ。純粹・自由という『概念解釈の』フォルムに固定したその輪郭（ライン）決定が

パイプを燻らせ、真分が応える。

「むろん君はわかっていると思うが、それらもただ直観に過ぎない。

それらの諸考概、すなわち『根拠の証明されていない』とか、『根拠』や『前提』とか、『意識』という場所、『状況・状態』とか、『球体』『純粹』、そもそも『直観』『諸考概』などなど、どれもこれも唐突に与えられ、唐突にその意識・状況・状態に投げ込まれているかのような観で受け止められているが、『唐突』も『与えられた』も同様直観でしかなく、何ら説明責任は果たされていない。フォルムだ、ラインだなどというのも同じだ。ペケペケだから、ポコポコですと言っているようなものだ。人類史が積み上げてきた『論理学』のルールの前ではね。

だが誰もがそれ以外のどのようなこともできない」

普簫も感慨深げに顎をさすり、

「月は美しいと言いながらも、満月輪（まんがちりん）には至れない。我々はそれ故に美への憧憬を抱く。さように創られたからさようなるかのよう」

月光の映る清酒に盈た備前の杯を傾けつつ、真分も言う、

「心強く大海に舵を切り、帆柱を立て、帆に風を孕ますしかない。天宇を切り裂く龍の如く新たな地平を啓いて肯定の光で編照するしかない。さよう大上段に構えずとも、結局、世界は流れて行く。

善いと思うならば、果敢に邁進するしかない。さて、それはともかくも、この焼き物、なかなかの逸品だろう。見給え、この緋襷^{ひだすき}といい、高台^{こうだい}の土味といい、武骨で繊細な、汲めども尽きぬ味わい何とも深く、見事な景色じゃないか」

「畢竟、そういうことではないのだろうか」

普齋は愉快そうに皮肉なる微笑を浮かべた。そして皓々たる月下で覽じていた和綴の冊子を再び開く。